

『邪馬台国はやはり日向（宮崎）にあった』

たかみやしんじ

2023年1月2日。久しぶりに皇居で一般参賀が行われた。それでも従前とは異なり一部分制限された形で行われた。今更言うまでもないことだが新型コロナウイルス感染を考慮した措置であり、文句を言う人も少ないのであろうし、当然の措置として受け止められていると思う。

コロナとの闘いはもう3年が経過した。昨今の雰囲気は、なんだか原因論（何が新型コロナウイルスを発生させたのか）はどこかに行ってしまったようである。5月からは、感染症法上の扱いが第2類相当から第5類に変わることもあり、原因の究明というようなことは多分遠くに行ってしまうのであろう。

2015年に国連サミットでSDGsが採択された。2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標とされる。17のゴールがある。その15に「陸の豊かさを守ろう」というのがある。昨今の黄砂の異常な飛来を目の当たりにすると、その重要性を実感しない人がいるだろうか。因みに、目標15で言われているのは、「陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の促進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する」である。

このコロナ等については、後の記述の古代の疫病の流行と関連するので少し記述してみたのであるが、そろそろ本来の邪馬台国論に話を戻すことにしよう。一言で邪馬台国論と言ってしまったがそもそも邪馬台国論とは一体どういうものなのか。主な論争は邪馬台国の場所がどこかということであろう。これに付随して、魏志倭人伝に記述される、卑弥呼とは誰か、奴国、狗奴国・投馬国など魏志倭人伝に登場する国々はどこに比定されるのか、台与は誰かなど多岐にわたる議論が重ねられてきているのであるが、それらの議論においてまだまだ多くの支持を得られている「定説」というものに至っているとはし難いのではないだろうか。

従来から発表されてきた多くの邪馬台国所在地の推論は、魏志倭人伝の記述を分析することによってその場所を探してきた。一方、日本の歴史書（「古事記」や「日本書紀」など）には、邪馬台国や卑弥呼に関する記述が殆どないと考えられてきたことから、邪馬台国所在地論に日本の歴史書が参照されることが殆どないのが現状ではないかと思われるのである。

これまでの研究は、中国の文献や日本の文献を深く、広く読み込んできたのであろう。そうして、多くの歴史家が史実解明に向かって善戦してきたのである。しかしながら、それでも邪馬台国の所在地に中々たどり着けないという現実に直面せざるを得ない現状であることは上記のとおりなのである。

この現状を打開するにはどうしたらいいのだろうか。画期的な考古上の発見や発掘がないと前に進めないのだろうか。或いはAI（人工知能）がそろそろ結論を出してくれるのだろうか。本稿では、一步踏み込んだ解釈を交えて議論を展開してみたい。

序章 弥生文化の渡来と伝播

縄文時代の日本列島の人口構成は東日本中心だったとされている。特に現在の中部・関東地方に多数の縄文人が居住しており、九州地区はそれほど目立った人口を占めていなかったという。ある推計によれば、縄文晩期（前800年頃）の九州地区推定人口は6,300人であった。（注1）

これが弥生時代（200年頃）になると、105,100人になるという。この千年の間に九州地区で何があったのだろうか。因みに同じ時期の中国地方が58,800人、近畿地方が108,300人、関東地方が99,000人と推定されている。（注1）千年の間のこれだけの人口増加は縄文人の自助努力では考えられないことである。既に多くの指摘がされているように、それは外国からの稲作や先進文化・技術を帯同した渡来が先ずは九州地区にあり、それが西から東へと伝播していったからと考えられている。

では、その渡来はどのような人々が何故に何処から来たのであろうか。巷間指摘されているのは、断続的な小さな渡来と歴史を形成するような大きな渡来があったのではないかということである。

中国や朝鮮半島において繰り返される戦乱を逃れてきた人々がいた。敗戦に追われて軍隊を引き連れてきた王族・貴族がいた。また、この時期中国では度重なる洪水・飢饉・疫病の蔓延にみまわれていた。それらを逃れた人々が新天地を求めて渡来してきた。

こうした外国からの渡来は、DNA分析など科学的にも考古学的にも確認されてはいるのであるが、残念ながら我が国の代表的な歴史書である「古事記」や「日本書紀」が外国からの渡来を神話として記述してしまった。そして、その記述スタイルは多分に叙情的なのである。だから史実の把握が困難を極めているのである。

例えば、古代の世界を表現することにおいて、高天原（天上界・神の国）、葦原中国（地上界・現世）、黄泉の国（地下界・先祖の国）というような言葉が頻繁にでてくる。これらの言葉は言葉としては理解できるし、記紀が記述の上で意図している意味合いも正確ではないものの、それらしくは理解できる。多くの読者や歴史研究者はそのように読んで理解しようとしているものと思われるのである。

しかしながら、歴史的事実を探求しようとした時に、高天原の神々と言われても、何のことか説明が難しい。葦原中国とはどこのことなのか、黄泉の国を生き

ている神が訪ねるとはどういうことなのか。冷静に考えると頭がパニックにならないだろうか。

そこで本稿では、この基本的な骨組みともいえる「高天原」・「葦原中国」・「黄泉の国」の定義付けをしてから神々の解釈に進んでいきたい。

さて、高天原である。この言葉は中国春秋戦国時代の政治の中心部であった「中原」（黄河の中下流域）からきているのだろう。中国の文明は現在では黄河文明・長江文明・遼河文明が三大文明とされている。「中原」は黄河文明の中心部でもある。狭義には周の王都があった河南省一帯をいうのだが、漢民族の勢力拡大により、河南省を中心に山東省西部、河北省山西省の南部、陝西省の東部にわたる華北平原を指すようになった。（注2）

高天原は、記紀の記述では天上界・神の国というように理解されるのである。しかしながら、それでは現実問題として何一つ歴史の解明には寄与しないのである。一つの試みとして、「高天原」を“稲作など先進文化を帯同して日本に渡来した、やまと国家形成に影響した外国人の一団”という概念と捉えることができる。これにより、かなり歴史に迫ってくるのではないだろうか。それらの外国人の一団の中でも特に中国からの渡来の一団の影響が強かった訳であり、ここでは、特に黄河文明・長江文明・遼河文明の一団と捉えておくこととする。

次に葦原中国である。記紀においては地上界・現世というように理解されるのだが、何故葦原中国という言葉をもって表現しなければならないのか。それは瑞穂の実る国こそこの時代の最重要なことだったからであろう。そして、葦原中国とは、中国から渡来した一団がやまと国家形成に適する土地と認識した国ということになる。

最後に黄泉の国である。記紀においては、地下界・死後の世界というように理解されるのであるが、神々（或いは人々）が死後の世界と往来するというこの意味は何なのだろうか。それは、地下にある死後の世界には亡くなった人、そしてそのご先祖様が住んでいるからということになる。ご先祖様のそのまたご先祖様も住んでいるのである。であるならばさらに一步進んで、黄泉の国が高天原の対局にあるということに思いを至らしめなくてはならない。即ち、高天原がやまと国家を形成した中国渡来の一団として考えるなら、黄泉の国とはやまと国家の形成に寄与しなかった、或いはそれに敵対した外国からの渡来の一団と捉えることが可能であり、そのように理解することで全体像がイメージアップされてくるのではないだろうか。

以上のことを念頭におきながら次の記述に進んでいきたい。

（1）月読命の新解釈

“月読命は、月の神とされている。しかしその神格については文献によって相違がある。「古事記」では伊邪那岐命が黄泉国から逃げ帰って禊ぎをした時に右目から生まれたとされ、もう片方の目から生まれた天照大神、鼻から生まれた須佐之男命とともに重大な三神を成す。”（注3）

イザナギの右目から生まれ夜の世界を担当する月読命。左目から生まれ昼の世界を担当する天照大神。この姉弟の関係は出自が似ていることを主張していると考えるのが自然ではないだろうか。即ち、この両神は「出自が中国である」と解することで視界が開けていくのである。しかも、大和国家形成に大いに影響を与えたからこそ三貴神の一角をなしたはずなのである。しかしながら、その後、月読命は大和国家形成の場面に登場しなくなる…。その理由はといえば、大和国家形成には影響したが皇統譜には名を連ねなかったからということになる。

本稿の新解釈として、月読命は「奴国」の祖先神を象徴的に描いているものと考えてみたい。BC 473年越王勾踐によって滅ぼされた呉。この時、呉の王族・貴族・軍隊は持ち前の海運力を生かして北へ逃れた。そして、九州などへ流れつき、稲作など先進技術をもたらし、やがて「奴国」を築き上げることとなる。「日本書紀」では、月読命は保食神を殺してしまい、殺した保食神から牛馬や蚕、稲などが現れると記述される。これらの記述は正しく稲作などの新文化の渡来を表しているのではないかと考えられるのである。

「魏略」では、“帯方から女王国まで1万2千里。…自ら太伯の後と謂う”と記述される。ところがこの部分、「魏志倭人伝」では、“郡から女王国までは1万2千里。…古来使いが中国を詣でた時大夫と称した”と記述されている。つまり魏志倭人伝では、女王国（邪馬台国）は太伯の後の国ではないと訂正しているのである。では太伯の後の国とはどこの国になるのだろうか。中国或いは朝鮮海峡から着地しやすいのは北九州地区であるということは多くの認めることであろう。そして、「奴国」は「魏志倭人伝」に2万戸ありと記述される北九州地区に存在した大国であった。

志賀海神社が福岡県福岡市志賀島に鎮座する。祭神はワタツミ三神。この志賀島から金印（「漢委奴国王印」）が出土した。この金印は、57年奴国王が後漢の光武帝に献じていただいたものだった。そもそも、中国の皇帝に献じるという考え方は中国からの渡来人だからこそその発想であろう。このことから、奴国は渡来人の興した国であると考えられるのである。

さて以上のことから、ワタツミ三神＝奴国＝太伯の後という関係式が成立するものと考えて良いのではないだろうか。そして、記紀ではそれらを総称して月読命と表現したのである。

（2）スサノオ渡来の新解釈

「日本書紀」における八岐大蛇の記述がある一書では、天から追放されたスサノオは、新羅の曾戸茂梨（そしもり）に降り、「この地吾居ること欲さず」と言い息子の五十猛神（いそたける）と共に土船で東に渡り出雲国斐伊川上の鳥上の峰へ到った。“（注4）

イザナギがイザナミの黄泉の国から逃げ帰って、イザナギの「鼻」から生まれたと記述されるスサノオは出自が中国ではないと考えたほうがよいだろう。

スサノオはしきりに母の国（イザナギの黄泉の国）に帰りたがり乱暴・狼藉を働きやがて高天原から追放される。そして、新羅に降り後に出雲に渡るという記述であるが、このことはスサノオ自身というよりもスサノオの祖先の出自を言っているのであろう。つまりは、イザナミをはじめとした一団の祖国は新羅だったのではないだろうか。そして、その何代目か後のスサノオが力をつけて、有名な八岐大蛇退治をやってのけたという訳である。

この大蛇退治をスサノオに依頼したのは、大山祇系のアシナヅチとテナヅチであった。娘（クシナダ姫）を救うため八岐大蛇を退治したスサノオは、クシナダ姫を娶り須賀の地に宮を建てたのだった。

問題はこのストーリーをどのように解釈するかである。記紀の多くの記述では、妻を娶る＝当該国の領有なのである。即ち、スサノオは大山祇系の国を領有した。しかも、界隈（八つの国々）をも同時に手に入れたことになる。大綿津見神（海の神）が渡来系でやがて奴国を興したたように、大山祇（大山津見神・山の神）も渡来系で、娘がスサノオに嫁ぎ国を興した。また、「古事記」では天孫ニニギはオオヤマツミの娘コノハナサクヤヒメを娶っている。このことは、スサノオがオオヤマツミ系と連携して出雲から九州に進出して大きな勢力を築いていったことを示しているのではないだろうか。だからこそ、三貴神の一柱として記述されるのである。

では、大蛇の尾から出てきた鉄剣をも手に入れ、そして、これを天照大神に献上するという記紀の記述は何を意味するのであるだろうか。このことが本当であるならば、スサノオがオオヤマツミ系と連携して九州に進出したという上記推論はあり得ない話となってしてしまうのである。史実に言及するなら、スサノオは鉄剣を天照大神に献上していないと考えたほうがよいのであり、従って、記紀の記述はスサノオの活躍を封じ込めるといふ編纂方針があったからそのように記述されたということなのであろう。このことについては、後ほど「国譲り」の新解釈でさらに解析することにする。

（3）天照大神渡来の新解釈

“天照大神（あまてらすおおみかみ、あまてらすおおかみ）または天照大御神（あまてらすおおみかみ）は、日本神話に主神として登場する神。女神と解釈され、高天原を統べる主宰神で、皇祖神とされる。『記紀』においては、太陽神の性格と巫女の性格を併せ持つ存在として描かれている。神武天皇は来孫”。（注5）

先述のように、天照大神の出自は月読命と並んで中国からの渡来であったろうと推量した。渡来系であろうと推量する第一の理由は「高天原」を統べる神と位置付けていることである。縄文時代からの土着の神であるならば「高天原」にはいないはずである。では、「高天原」はどこにあるのだろうか。それを聞かれても、どこそこといふ答えを述べることはできない。「高天原」は“稲作など先進文化を帯同して日本に渡来した、やまと国家形成に影響した外国人の一団”という概念だからである。

次に重要と思われることは、天照大神が皇祖神とされていることである。記紀では初代神武天皇は天照大神の来孫と記述される。しかしながら、昨今では欠史八代と称して2代から9代天皇の存在を疑う論調も有力視されている。だとすると、日向を出て、宇佐・北九州・瀬戸内海と上り大和を目指す東征譚はどうなってしまうのだろうか。この東征譚の主人公は本当に神武天皇だったのだろうか。

もうひとつ、「日本書紀」に天照大神が自ら神田を営み新嘗の祭りを行ったと記述される巫女的性格も何か変である。この頃神道の儀式が確立していたことには疑問があるし、渡来系の人々が神道の祭りをを行うというのも違和感があるがいかかであろうか。

以上の疑問に答えられるのは、記紀の編者が天照大神を卑弥呼に擬したかったと考えることである。彼らは、邪馬台国の所在地を日向（宮崎）と認識した。記紀が編纂された頃は「魏志倭人伝」だけでなく多くの漢籍を読むことができたはずであり、渡来人も編纂にかかわっていたとも言われている。従って、邪馬台国の所在地が日向（宮崎）であることや卑弥呼の人物の特定もできていたものと考えられるのである。

では、何故に天照大神を卑弥呼に擬したかったのか。それは記紀を編纂した時の権力がスサノオと連携したオオヤマツミ系の皇統譜にしたくなかったということだろう。しかしながら、記紀の編纂者は邪馬台国や卑弥呼をも記述から消してしまったのである。これは一体どういうことなのだろうか。それは、邪馬台国や卑弥呼が中国渡来系（＝徐福一行）であるからに他ならないだろう。徐福一行の皇統譜にすること、このこともまた時の権力者にとって好ましくないことだったのである。

第一章 二つの天孫降臨

前章で明らかにしたように、記紀編者は邪馬台国を日向（宮崎）とし、卑弥呼を天照大神に擬したかったことを記述した。本章ではそのことをもう少し詳細にしていきたい。

（1）ニニギの降臨

“天照大御神の**神勅**を受けて葦原の中国を治めるために、高天原から筑紫の日向の襲の高千穂峰へ天降った。邇邇藝命は天照大御神から授かった三種の神器をたずさえ、アメノコヤネなどの神々を連れて、高天原から地上へと向かう。途中、サルタヒコが案内をした”。（注6）

ニニギは葦原中国を治めるために筑紫の日向に天降ったとある。このことに関し、せつかく出雲を平定（国譲り）したのだから遠回りしないで大和に降りれば良かったのではないかという議論もある。そのことについては順次明らかに

することにしていすが、ここでは、出雲を平定した天照大神（皇祖神）が全国統一のために次に平定しなければならない国として日向を指名したということをも明記したい。何故なら、この頃の葦原中国の勢力図が先ずは出雲国、そして日向国そして奴国を中心とする北九州地区であったからである。

なお、日向を北九州（日向峠など）とする説も聞こえるが、「日本書紀」の景行紀で日向（子湯縣）の記述がある。また、「先代旧事本紀」では筑紫国、豊国、肥国、日向国の四面としている。これらの記述も、筑紫の日向と言ったら筑紫洲の日向国と明言しているのである。つまりは、やまと国家の原点が日向にあったからこそ、そのような記述にならざるを得ないのである。

ニニギはこの日向の襲の高千穂峰に天降った。この降臨の具体的な場所の説として宮崎の高千穂説と鹿児島霧島連峰説があるのだが、結論がでていない。高千穂に降り立った時ニニギは“遠くは朝鮮に面し、近くは笠沙の岬にまっすぐ通じている。朝日、夕日も輝き最上の土地だ”と称賛して壮大な宮殿を築くのであった。この頃の時代にこのような山の奥地に壮大な宮殿が築かれるはずがないのであり、この記述は一つの象徴的な表現と理解しなければならない。どういふことか。それは、巫女（或いは祈祷師）の祈り（占い）の場所と考えることで存立の妥当性がでてくるのである。即ち、築かれた宮殿で何が行われていたのか。そして、その宮殿には巫女（或いは祈祷師）が常駐していたのかということが問われなくてはならないのである。若し、その宮殿が特別の祭祀の場所として築かれたのだとすれば、高千穂も霧島連峰も両方が存立する可能性を秘めている。決め手は一重に卑弥呼の実像にかかってくるということになるのではないだろうか。後述するので暫くお待ちいただきたい。

さて、天降った日向の襲の高千穂峰が祈りの場所とすれば、普段居住していた場所はどこにあったのか。両方に同じように近い場所となると、それは宮崎ということになるのだが、この宮崎の地がどういう場所であったのかということが次に論じられなくてはならない。

宮崎県南部から鹿児島県東部にかけて「地下式横穴墓」群が特異的に存在している。「地下式横穴墓」は地面から竪穴を掘り、そこから横穴を掘って造られた墓である。群というから、数十基から百基以上が群をなして発掘されているのである。そして、宮崎県から鹿児島県での発掘総数は1000基を超えているという。副葬品から5世紀から6世紀古墳時代のものとされている。

このほか宮崎県には西都市に西都原古墳群が発掘されており、高塚墳319基（円墳・方墳・前方後円墳）、横穴墓10基、地下式横穴墓12基が確認されている。これらは、4世紀初頭から7世紀前半くらいの築造と推定されている。

これらの記述だけを考察すると高塚墳と地下式横穴墓が混淆して築造されていた4世紀から7世紀ということになるのだが、そのようなことではない。高塚墳はそれなりの立場の人の墓とみるべきであり、それはそれなりの地域として象徴的な位置に築造されなければならなかったはずである。

地下式横穴墓についても同様で、初期においては平地のなんでもない土地に築造されていたが、村や国が構築されていくに伴い、首長クラスは次第にそれなりの場所に築造されるようになっていったのである。

どういうことか。初期においてなんでもない平地に築造された地下式横穴墓は土に還ってしまい発掘されることがないのである。そのように考えると、4世紀初頭から築造されていたという推定は大きく見直しが必要ではないだろうか。少なくとも数百年の編年がなければこのような埋葬文化が残されるはずがないのである。とすれば地下式横穴墓は、紀元前後から5、6世紀にかけて築造されていたとみても大きくは外していないのではないかと考えられるのである。

では、この「地下式横穴墓」文化は誰が宮崎・鹿児島にもたらしたのであるか。実は、中国山東省に極めて類似の墓が発掘されていることが分かってきた。山東省タンジョウ市で多くの地下式横穴墓が発掘された。124基を数え、その多くは東周時代（紀元前8世紀～紀元前5世紀）のものという。また、宮崎県串間市王之山で発見された「玉壁」の祖型と思われるものが、中国山東省の魯国の時代（紀元前8世紀～紀元前3世紀）の都から出土したというのだ。玉壁は一般的には威信財とされるのであるが、また、祭祀や占いにも用いられていたとも言われるのである。

この中国山東省は徐福の故地なのである。徐福は秦の始皇帝の命を受けて、老若男女3000人を引き連れて東の神仙の地に「不老不死の仙薬」を求めて旅立ったのだ。日本列島各地にこの徐福一行が着地したという伝承が残されており、その数が数十とも言われるのだが、いずれも物的な根拠に乏しくその信憑性には疑問符がついている。とはいっても、これだけの伝承の存在は無視し難いものがあることも認識しなくてはならないのではないだろうか。

それら徐福伝承地の一つに宮崎県がある。延岡市にある今山は蓬莱山とも言われ、徐福一行がこの山に仙薬を求めて登ったという。麓には「徐福岩」があり一行が乗ってきた船をつないだ岩と言われているという。また、宮崎市には芳士という地名があり、この地で何らかの足跡を残したことから徐福のことを示す芳士という地名がついたとも言われる。因みに、近くには宮崎市跡江に生目古墳群が発掘されており、4世紀から5世紀に築造された前方後円墳8基、円墳43基、地下式横穴墓56基からなる。特に、100m級の前方後円墳3基が集中しており、古墳前期の九州では最大規模の首長墓群とされている。そして、地下式横穴墓56基の発掘である。ここまで論を進めてくると、どうやら記紀の編者たちの認識、即ち邪馬台国が日向にあったこと、また、天照大神を卑弥呼に擬して著したかったのではないかということが少しずつ真実味を増してこないだろうか。

ところで、徐福一行が東海の蓬莱山に「不老不死の仙薬」を求めたとはどういうことであったのだろうか。実は、中国秦の時代にも現代と同じような疫病が流行していたことが指摘されているのである。その昔の日本列島（＝縄文時代）は海に隔てられて、疫病菌から隔離されていた。だから、大陸で疫病が大流行して

も倭人国では安寧な日々が過ごされており、そのことが大陸の人々の知るところとなり、倭人国は彼らの憧れの地となったのである。そして、そのことを中国では日本列島には「不老不死の仙薬」があるに違いないと考えてしまった。こうして、徐福は3000人の老若男女を引き連れて倭人国に向かうことになったものと推量できるである。

この徐福一行の渡来の目的を思いやると切実な逼迫感が伝わってきて仕方がないのである。そして、地下式横穴墓は大陸との共通性がある。これらのことから、徐福一行が日本列島を目指し九州に着地したであろうこと、そして、一部のグループが南九州（日向）に着地したであろうことは想像に難くない事実として認識できるのではないだろうか。

（2）ニギハヤヒの降臨

次にニニギが天照大神から授かった三種の神器について検討してみたい。三種の神器とは、八咫鏡、草薙剣、八咫瓊勾玉とされる。このうち、鏡と勾玉は天照大神の岩屋隠れの際に榊に吊るされたりしている。問題は草薙剣である。先述のとおり、草薙剣はヤマタノオロチの尾から出てきたものであるが、これを記紀の記述ではスサノオは天照大神に献上したのだった。そして、須賀の宮で幸せに余生をおくるがごとくに記述されている。この記述は本当のことだろうか。

そこでここでは、スサノオ（或いは後裔）のその後の活躍譚を推論しなくてはならない。ヒントはこの草薙剣が三種の神器として扱われていることそのものにある。そして、草薙剣がやまと国家形成の過程において、大いに目立った活躍をしているからである。

八岐大蛇から出てきた草薙剣がどのような経緯でスサノオから天照大神に渡り、ニニギに授けられたのか。このことを自然な歴史に置き換えるには、所謂大国主の「国譲り」を見つめなおすしかないのである。まずは、大国主の時代をスサノオの時代に置き換えなければならない。詳論は別の機会に譲るが、ここでは三つの大きな論点に照準をあてて検討してみたい。

一つは大国主の国造りとはスサノオの国造りだったことである。スサノオはヤマタノオロチを退治した後、大山祇系の足名椎神と手名椎神の娘クシナダヒメを娶った。そして、大山祇族と提携して全国進出に乗り出していくのである。

西は筑紫に向かい、宗像海神族と提携、遠賀川界限を席捲することに成功する。これを担ったのはオオヤマツミの娘神大市姫との息子大年尊だった。

東は、タケミナカタを建てて越から科野諏訪に進出した。因みに、長野県諏訪市には足長神社・手長神社が対で鎮座する。祭神はアシナヅチ・テナヅチ。タケミナカタに随従する神と伝わる。そして、出雲族は諏訪を拠点にして碓氷峠を越えて北関東に進出していった。このタケミナカタについて「古事記」では国譲り譚において、タケミカヅチと最後の戦いを展開し、タケミナカタが敗れ諏訪の海に蟄居させられるのだが、そのようなことが史実でないことはその後の諏訪

軍神の活躍をみれば明らかなことであろう。ただ、碓氷峠を挟んで鹿島神宮（祭神タケミカヅチ）、香取神宮（祭神フツヌシ）と対峙していたことはあったかもしれない。なお、「先代旧事本紀」においてタケミナカタは大国主と高志ヌノカワ姫との子とされるのだが、国譲りが大国主の時代のことではないのであり、大国主の存在そのものが危うくなっているのであることを心得ておかななくてはならない。

二つめは五十猛の活躍譚である。「日本書紀」では、五十猛神はスサノオと共に出雲国斐伊川に降りた後、筑紫から大八洲に樹木の種を植え青山に被われる国にしたと記述される。また、紀伊の国に祀られるとされており、和歌山市に鎮座する伊太祁曾神社の祭神として広く知られている。この五十猛神、妹神2柱と全国に植樹したと記述されており、武力による全国の征討というニュアンスで記述されない。穏やかに開拓の地を求めて進み、紀伊国に着地したということだろう。

三つめがいよいよニギハヤヒの降臨である。「日本書紀」の記述では、神武東征に先立ち天照大神から十種神宝を授かり、天磐船に乗って河内国（大阪府交野市）に降臨し後に大和に移ったとされている。そして「先代旧事本紀」によれば、大和の豪族ナガスネヒコの妹を娶り、一族の長として当地を支配した。後にイワレヒコ（後の神武天皇）が大和にやってくると服従しないナガスネヒコを殺害し、イワレヒコに支配地を差し出すのだった。因みに、ナガスネヒコとは長髓彦（＝長脛＝足長＝アシナヅチ系）でオオヤマツミを類推させるのである。

さてニギハヤヒが授かった十種神宝であるが、これには八握剣（＝草薙剣）と沖津鏡、辺津鏡などがある。八握剣を天照大神が授けられるはずがない。授けたのはスサノオであろう。そして、鏡は宗像大社の沖津宮、辺津宮を想起させる。即ち、ニギハヤヒはスサノオの命を受けて、八握剣を携えて宗像海神族の漕ぐ船に乗って河内国を目指した。そして、遂には大和をも支配下に治めるのであった。

では、ニギハヤヒとは誰であったのか。これこそスサノオが娶ったオオヤマツミの娘神大市姫との子、大年尊ということになる。大年尊は遠賀川を出立、瀬戸内海を経て河内国白肩津に至る。ここでナガスネヒコ軍と戦いになり苦戦、男之水門（和歌山市）に陣を構える。ここ（和歌山市）は五十猛神が先行して開拓した地であり、ここを拠点にして遂にはナガスネヒコを撃破したのであろう。

ところが、記紀が伝えるところではイワレヒコは更に東の熊野（新宮市）から攻めて大和を平らげたというのである。これはどういうことを意味するのか。実は、新宮市は徐福一行が着地して築いた最大といってもいい位の土地だった。あくまでも伝承にもとづくものではある。しかしながら、現在では伝承ということになるのだが、記紀編纂の頃も伝承であったのか。太陽を背にして敵に立ち向かわねばならないというような発想が唐突に出てくるはずがないのである。つまりは、ここ（新宮市）に徐福一行の大きな勢力が築かれていたからこそ、ここを拠点にして大和を攻略したに相違ないのである。

この大和攻略はあたかも禪譲のような記述がされるのであるが、実際はそのようなことではなかった。ナガスネヒコをはじめ一族は抹殺されたはずである。これが大和国譲りの実際であった。だから、後にオオモノヌシの祟りが発生したりする事態になってしまうのである。

このオオモノヌシの祟りについては、もう少し詳しく言及しなくてはならない事項であるが、本稿では誌面の都合もあり、別の機会に譲らせていただきたい。

さて、ここで話を少し整理しておこう。記紀の描く神武東征譚は、日向を船で出発して、宇佐→岡田宮（遠賀川）→瀬戸内海→河内国→男之水門→熊野→橿原と進軍していくのである。

このうち、日向から岡田宮までは記紀の修飾した物語ということであろう。ニニギが日向に降臨して、その後裔のイワレヒコの東征だから、日向から船出せざるを得なかった。そして、ウサツヒコとウサツヒメの歓待を受ける。しかしながら、宇佐といえば天照大神とスサノオの誓約によりスサノオの剣から生まれた宗像三女神を祀る宇佐神宮が鎮座する重大な地である。この宮との関わりを語らずして次の寄港地に向かうことなどはとても考えにくいのであり、単なる修飾とされても仕方のない記述ということになる。

次の行程、岡田宮から男之水門までは大年尊の進軍の実績を頂戴して、あたかもイワレヒコが進軍したかような物語にしたものと考えられる。詳細は先述のとおりである。大年尊は登美の豪族ナガスネヒコの妹を娶り（＝大和を攻略）、大和を領有したのだった。

そして、その大和をイワレヒコが熊野から攻めて大和を攻略したという物語をくっつけて、すべてイワレヒコの手柄にしてしまったという訳である。

では次に、剣の行方について整理しておこう。ニニギの天孫降臨においては、天照大神から三種の神器を授かった。この中にはどういう訳か、草薙剣が含まれている。ニギハヤヒの降臨にあたっては、これも天照大神から八握剣（＝草薙剣）を授かっている。草薙剣は二口あったのだろうか。そのようなはずがない。ヤマタノオロチの尾から取り出したのは一口だったはずである。

先述のように、大国主の国造りはスサノオの国造りだった。従って、大国主からの国譲りという記紀の物語は史実ではなかった。従って、それを受けてのニニギの天孫降臨も史実ではなかったということにならざるを得ないのである。即ち、先述のようにニニギの降臨とは徐福一行の日向への着地を記述したにすぎないことになる。徐福一行が八岐大蛇の剣を帯同するはずがないのである。

ニニギの降臨が史実でないということになると、剣はニギハヤヒの帯同した剣が三種の神器の剣ということになってくる。ニギハヤヒ（＝大年尊）はスサノオから草薙剣を授けられて大和に進軍する。そして、登美のナガスネヒコを攻略し、言わば「大和国」を建国したのだった。そして、この「大和国」を奪ったのが熊野から大和を攻めたイワレヒコだった。ここにおいて、ようやく三種の神器の草薙剣をイワレヒコが手中にし、神武天皇を名乗ることができることとなったのである。記紀において、橿原に宮を造ったと記される。

しかしながら、イワレヒコに擬される初代天皇が本当に神武天皇であったのか、また、その皇位に就いたのは何時のことであったのかということについては、更に推論を進めないとも明らかなにならないものと思われる。

第二章 卑弥呼は誰か

第一章の論述で「大和国」として最初の政権を樹立したのは、ニギハヤヒ（＝大年尊）だったと明らかにされた。といっても、全国に覇権を主張するようなものではなかったし、せいぜい大和地区界隈を差配する程度の規模だったものと思われる。

そして、その後この地をニギハヤヒの後裔から奪った一派がいた。それが、イワレヒコ（＝神武天皇）と記紀は言い、全国に覇権を主張したかのごとくであるがいかげんであったのか。初代天皇だから神武天皇は始馭天下之天皇（はつくにしらすすめらみこと）と言われた。しかしながら、第10代崇神天皇も所知初國御眞木天皇（はつくにしらししみまきのすめらみこと）であり、初めて全国に覇権を主張しているのである。

本章ではこれらのことの史実を明らかにするべく論を進めて参りたい。その手掛かりは卑弥呼にあるだろう。そして、卑弥呼が天照大神であるのかどうかを明らかにすることだろう。

（1）魏志倭人伝の証言

「魏志倭人伝」は通称で、正しくは中国西晋時代の歴史家の陳寿によって著された「三国志」の中の「魏書」東夷伝倭人条のことを言うのである。三国とは、魏（220～265年）、呉（222～280年）、蜀（221～263年）のことである。魏の最後の皇帝（元帝）が263年に蜀を滅ぼした。そして、元帝から皇位を禅譲された司馬炎（武帝）が265年晋王朝を建てたのである。さらに280年、武帝は孫氏の呉を打ち破り、約1世紀ぶりに中国は統一されたのである。都は洛陽に置かれた。

この魏志倭人伝にこの頃（中国の三国時代）の日本のことが記述されている。しかしながら、倭人条は2千字くらいの文字数で記述されており、また、様々な解釈ができる表現であることから、邪馬台国の所在地はどこか、卑弥呼は誰か、台与は誰か、倭国大乱とは何か、狗奴国は何処かなどなど議論百出、江戸時代から300年議論されているが未だ定説として纏まるに至っていない現状なのである。

魏志倭人伝は、“倭人は帯方東南の大海の中にあり。山島に依りて国邑をなす。旧百余国。漢の時に朝見する者あり。今使訳通ずる所三十国なり”から始まる。この「旧百余国。漢の時に朝見する者あり」は、「前漢書」から引いたものだろう。

この中国の王朝に献ずるという行為は弥生時代（渡来人の首長国）からのことで、縄文時代にはなかった発想であろうと考えられる。渡来人の国造りは、先ず

は朝鮮海峡から九州島から始まった。弥生文化が定着した。そして、国の威信は中国王朝に認めてもらうことが最も重要なことであり、競って中国王朝に献じた。同時にまた、弥生文化は新たな地を求めて、九州から順次日本列島を東に広がっていったのである。

以上のことから、倭人は初期の渡来人が朝鮮海峡から九州島に造った国々に在たものと理解するのが自然ではないだろうか。魏志倭人伝では、倭人以外の周辺に在た人々を認識していた。そして、これを倭種と称していたのである。

“南、投馬国に至るには水行二十日。五万余戸ばかりあり”。

“南、邪馬台国に至る。女王の都する所なり。水行十日、陸行一月なり。…七万余戸ばかりあり”。これは旅程の最後の記述であり、邪馬台国の様子を記述している。北九州地区からの旅程であろう。

ここの旅程から距離表記でなく日数表記となっている。また、五万戸或いは七万戸という多大な戸数より、これらの国の情報は聞き込みによるものと考えられている。いずれにしても、この記述から考えると北九州地区からは相当に遠くに在らねばならないことになる。

さて、帯方郡の官吏は邪馬台国に行っていないという想定で、聞き込み情報を報告したものとすることは適当なのであろうか。因みに、邪馬台国北九州説にたった場合、伊都国から邪馬台国へは道があったはずであり、卑弥呼に会えないまでも、女王が都する所は見ることはできたはずなのである。

北九州地区の甕棺墓の遺跡分布や鉄鏃の発掘分布は界隈に点在しており、各地に住んでいた人々の交流ルートが存在したことを示しているのではないだろうか。とすれば、伊都国に駐在した帯方郡の官吏は歩いて邪馬台国へ行けたはずなのである。魏志倭人伝では、“国々に市ありて、有無を交易し…”と言っている。しかし、邪馬台国とはそれができなかった。何故かといえば、邪馬台国は北九州地区にはなかったからなのである。

魏志倭人伝の記述。“その国、本亦男子をもって王となす。往まること70、80年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子をたてて王となす。名を卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫壻なし。男弟ありて、佐けて国を治む。王となりてより以来、見る者少なし。婢千人を以て自ら侍らしめ、ただ男子一人ありて、飲食を給し、辞を伝え居るところに出入りす。宮室は楼観・城柵、巖かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す”。(注7)

平たく言えば、倭人の国々は男子を王としていたのだが、乱れた。相互に何年か戦争状態になってしまった。そこで、これを整えるため卑弥呼を共立して王とした。卑弥呼は鬼道に優れており国民の信頼を得たというようなことが記述されている。また、卑弥呼は独身で年をとっている。弟がおり、協力して国を統治している。

注目すべきは卑弥呼が強力な軍事力をもって国々を統治したのではないことである。それは鬼道であったことである。そして、共立したのであるから、これ

に参画した国々は卑弥呼と同様の宗教観をもっていたからこそ支持されたということである。この頃、九州の多くの地域をカバーするような宗教観とはどのようなことであつたのだろうか。

本稿では、卑弥呼の原像を沖縄に残る「斎場御嶽（せいふあうたき）」を管掌する「聞得大君（きこえおおきみ）」に求めてみたい。「聞得大君」は、琉球の信仰において最高位の呼称であり、琉球国王に並び、琉球王国全土を霊的に守護するものとされていたのである。この「聞得大君」、国王の「をなり神」（妹が兄を守護する）と言われる。これが卑弥呼と重なってこないだろうか。

また、魏志の伝える“鬼道に事え、能く衆を惑わす”ということが邪馬台国一国のことなら容易に理解できるが、九州地区広域で認知され、女王に共立されたということの意味は、それこそ、九州地区の多くの国々が同様の宗教観を有していたということになるのだろうか。だから、人々にも受け入れられたのである。

実はこの「聞得大君」的な宗教観は、もっと時代を遡って沖縄に根付いていたのである。琉球王朝時代以前の沖縄の村落時代（3世紀～12世紀）、御嶽が信仰対象であり、この祭祀を根神（姉妹）が司り、その信託によって根人（兄弟）が政治を行ったという研究も発表されている。このような宗教観が九州地区にも根付いていたとすれば、卑弥呼が女王に共立されたことが自然に理解されるのではないだろうか。そして、それは沖縄から流れてきた可能性を秘めているのである。

さらに、沖縄には「ニライカナイ」という神の世界が東方にあるという信仰があるとされる。これは、中国における神仙思想にいうところの東の海に在る蓬莱山と同じことを言っているのではないだろうか。このような信仰が自然発生したとは考えにくく、矢張り中国からの渡来の影響とみたほうが自然に思われる。

上記のように、「聞得大君」の宗教観が沖縄から流れてきたとすれば、この「ニライカナイ」の信仰も同じように沖縄から流れてきたのかもしれない。先述したように、徐福一行は日向（宮崎）に土着したのだった。とすれば、同根の信仰の人たちが倭人国で合流したということになるのだがいかがであろうか。

（2）魏志倭人伝の沈黙

魏志倭人伝は200年前後の倭国のこと、倭人のことを伝えている。魏志の中の幾つもの東夷の状況を伝える中の一つ、倭人の条なのである。東夷のなかでは辺境の地ではあるが、記事に関して特段の扱いを受けているということはない模様である。しかしながら、曹操が後漢献帝から魏王を封じられ、その子曹丕が220年文帝として即位、魏王朝が興ったことには留意しておく必要がある。

さて、魏志倭人伝の記述ではどうしても邪馬台国の場所を比定できない。それもそのはずである。比定できないように記述しているからである。何故そのよう

なことをしたか。それは、邪馬台国が徐福一行の建てた国であることを明らかにしたくなかったからであろう。

伊都国に常駐していた帯方郡の官吏は邪馬台国の場所を知っていた。そして、卑弥呼には会えないまでも邪馬台国に行っていたと考えられる。その頃の中国には「一寸千里法」という測量技術が確立しており、夏至の太陽南中時に洛陽付近の南北2地点で8尺の棒を立てその影の長さを測り、その日影長に1寸の差がある時2地点間の南北距離を千里とするというものである。この原理にピタゴラスの三角形定理（古代中国では経験値で解っていたらしい）を使うことにより、帯方より万二千余里の位置が分かるというのである。

但し、そのためには邪馬台国において、夏至の太陽南中時に8尺の棒を立てて日影長を計測する必要がある。万二千余里という距離は里程から計算されたものではない。里程からは割り出せない。では、どこから発せられた数値なのだろうか。誰かが夏至の時に邪馬台国に行って8尺の棒を立てて日影長を計測したとしか考えられないのである。それは誰か。それは、帯方郡の官吏以外には考えられないのである。即ち、帯方郡の官吏は邪馬台国の場所を知っていた。そして、卑弥呼には会えないまでも邪馬台国に行っていたということになるのである。

因みに、東京都立大学名誉教授野上道男氏によれば、この「一寸千里法」により帯方郡から万二千余里の位置は現在の宮崎県宮崎平野南部。余里というからそこから少し南ということになるとされている。(注8)

さて以上のことから、帯方郡の官吏は邪馬台国の場所を知っていた可能性が濃厚である。そして、そのことを報告していたはずである。では、魏志倭人伝の記述において陳寿は何故邪馬台国の場所を明言しなかったのかという疑問が起こってくるのである。その答えは、邪馬台国が徐福一行が興した国だからということになるのではないだろうか。徐福一行は秦始皇帝の命で神仙の国に向かったのだった。その後400年に及ぶ前漢・後漢の時代となる。それを受け継いだ形の魏である。従って、秦始皇帝の流れを汲む邪馬台国の場所などを明瞭にすることを避けたということになるのではないだろうか。

魏志倭人伝の記述で場所を比定できない国がもう一つある。それは狗奴国である。邪馬台国北九州説では多くの論者が熊本県に比定している。邪馬台国を北九州のどこかに比定すると、その南は熊本県が有力となる。また、熊本県内から発掘された鉄器の多さや狗古智卑狗という官名と菊池という地名を類推してのことと思われるのだが、先述のとおり本稿では邪馬台国を宮崎県に求めており、狗奴国＝熊本県説には否定的である。

魏志倭人伝では、“その南に狗奴国あり、男子を王となす。女王に属さず。”女王国より東、渡海千余里にして又国あるも皆倭種なり“である。これに対して、後漢書では、“女王国より東、海を千里渡ると狗奴国に至る。皆倭種といえども女王に属さず”と記述されている。

この狗奴国の位置を判定するにあたって、女王国各国に置かれた軍隊のことを検討する必要がある。この頃の軍隊の役職名は卑奴母離（ヒナモリ）とする説が有力である。このヒナモリを国の副官とした国々は、対馬国、一大国（宍岐）、奴国、不弥国である。これらの国々の位置関係から、国の要である一大卒の置かれた伊都国を守るため、東の海からの攻撃や東の海からの上陸に備えた軍隊編成であることが推量されるのである。

即ち、女王国と敵対していた狗奴国は女王国の南に位置する国ではなく、東に位置する国だったことになるのである。この頃（200年頃）、女王国の東に位置する強力な国となると、四隅突出型墳丘墓が多く発掘され大きな勢力を張っていたと考えられる出雲国がクローズアップされるだろう。海を渡る・倭種の国という記述にも合致するのである。

では、この出雲国のことを帯方郡の官吏は知らなかったのだろうか。狗奴国と女王国は前々から仲が良くなかったので、ヒナモリも前々から設置されていたと考えられる。そして、帯方郡の官吏は対馬国、一大国、奴国、不弥国には行っていたであろうから、何のための軍隊編成であるかは自ずと理解できたはずである。つまりは、狗奴国の場所を知っていたことになる。しかしながら、魏志倭人伝では陳寿は狗奴国の位置を不明瞭な記述にした。邪馬台国が宮崎県とすれば、その南にある狗奴国は鹿児島県か奄美の方になってしまうが、その位置にある国が女王国と敵対して、女王国が苦戦するような勢力を保持していたとは考えにくいのである。

帯方郡の官吏は狗奴国の場所を知っていた。そして、そのことを上位者に報告していたはずである。そして、その報告書を陳寿は見ていると考えたほうが自然である。すると、ここでも魏志倭人伝の記述において陳寿は何故狗奴国の場所を明言しなかったのかという疑問が起こってくるのである。その答えは、狗奴国＝出雲国はスサノオが興した国であり、その何代か後の時代（200年頃）には四隅突出型墳丘墓を埋葬文化とする国となり勢力を張っていた。問題は、この四隅突出型墳丘墓の埋葬文化がどこから渡来したのかということである。

本欄の小稿（「相撲のルーツは四隅突出型墳丘墓だった」）で詳述したように、四隅突出型墳丘墓の故地は高麗だった。つまりは、高麗界隈からの渡来人が200年頃の出雲国を建てた可能性を秘めているのである。一方、この頃遼東半島に起こった公孫氏が襄平（現在の中国・遼陽市）を都に定め、版図を拡大し、三代目の公孫淵の時代には中国からの自立を宣言し、楽浪郡、帯方郡をも領土とした。しかしながら、238年魏の将軍司馬懿に攻められ滅亡する。

この公孫氏朝鮮から押し出された一派が出雲に上陸して、四隅突出型墳丘墓の埋葬文化をもたらした可能性が濃厚である。とすれば、魏の推している邪馬台国がそのような国に苦戦していることを詳細に記述する訳にはいかなかったのではないだろうか。派遣された張政も安易に参戦することは控えざるを得なかった。ひたすら告諭することに徹したということだろう。

終章 天照大神の原像

第二章で論じたところであるが、卑弥呼の原像を琉球に残る「聞得大君」に求めた。そして、「聞得大君」は国王の「をなり神」（妹が兄を守護する）だった。つまり、本来的には国王がいて、それを守護するのが「聞得大君」だった。ところが、大陸から持ち込まれた疫病によって様相が激変した。北九州地区周辺で蔓延し、そして、生存をかけた争いが拡大していったのである。その頃は疫病を治癒させる薬がなかったため、ひたすら祈るしかなかった。そこで、祈祷士が俄かに脚光を浴びることになったのである。それが、卑弥呼の原像だった。

（1）スサノオと天照大神の誓約

イザナギに海の統治を命令されたスサノオであったが、これに従わず、泣きわめいてばかり。海は枯れ、地上は災いに満ちてしまう。遂にスサノオは葦原中国から追放を言い渡される。そこで、天照大神に別れを告げようと高天原に挨拶に赴いたスサノオであったが、高天原を奪いにきたと思った天照大神はスサノオを問いただすのだった。そこでスサノオは身の潔白を証明するため、「誓約」をして子を生むことを提案する。天照大神がスサノオの剣から三柱の女神を生む。次にスサノオが天照大神の勾玉から五柱の男神を生む。

ここら辺の天照大神についての記紀の記述は祈祷師卑弥呼とは関係ないようである。出雲から北九州に進軍してきたスサノオが、高天原の天照大神に会いにきたというのであるから、遂に日向（宮崎）に接近してきた。しかしながら、一戦交えるのではなく、「誓約」をして子を生むことを提案したというのである。子を生むとは土地の領有であるから、領地を分け合ったと解釈できる。

スサノオが領有したのは、宗像三女伸だった。タギリヒメ、イチキシマヒメ、タキツヒメはそれぞれ、玄界灘の沖ノ島、大島、玄海町に祀られている。姫を領有することの意味は国の支配と同義であるから、スサノオは宗像海神族の領有する界限を支配下においたものと解釈されるのである。

一方、天照大神の生んだのは、天孫降臨したニニギの父オシオミミ、国譲りの使者アメノホヒ、アマツヒコネ、イクツヒコネ、クマノクスビである。これらの国々について記紀は明らかにしないのである。明らかにしないことには理由がある。それは、これらの国々を明らかにするとそれが徐福一行の進出地であることが明らかになってしまうからであろう。これらの国々については別稿で探求する予定である。

スサノオと対峙した時、天照大神は男のように髪を結び男のように装い、背には千本、脇腹には五百本の矢を入れる武具を備えたと記述される。

これはどういうことを意味するのだろうか。これは、天照大神が男であること、そして、相応の軍隊を編成して待ち受けたことを意味するのだろうか。即ち、この

段で記述される天照大神は祈祷師卑弥呼ではないのである。つまり、妹の「聞得大君」でなく兄である国王のことだったと理解できるのである。しかしながら、その後、北九州地区から疫病が発生、次第に九州島各地に広がってしまう。そこで、祈祷師卑弥呼が女王として共立されることになるのである。

(2) 天照大神の岩屋隠れ

「古事記」の記述。天照大神との「誓約」で身の潔白を宣言したスサノオの乱暴狼藉はひどくなるばかりだった。ある時馬の皮を剥ぐと機織り小屋に投げこんだ。これに驚いて転げ落ちた織り女が尖った機具に刺さって死んでしまうのであった。弟をかばい続けてきた天照大神もさすがに恐れて天の岩屋に隠れてしまうのだった。天照大神が天の岩屋に隠れると高天原も葦原中国も闇に一つまれて災いが広がっていくのだった。

この弟をかばい続けてきた天照大神とはなにを意味するのだろうか。天照大神、月読命、スサノオという三貴神において、スサノオは天照大神の弟であるから、特に問題はないかのごとくである。

ところが、魏志・韓伝に驚くべき記述があるのである。“辰韓は馬韓の東にある。その古老は代々伝えて次のように言う。古の逃亡者で秦の労役を避けて韓国にたどり着き馬韓がその東の外れの土地を割いて与えたのだと”。“国には鉄が出て、韓・濊・倭が皆これを採っている。楽浪・帯方の二郡にもこれを供給している。また、男女は倭に近く、入れ墨をしている。その風俗では、道を行く者が出会った時、皆立ち止まって道を譲る”。

馬韓は後の百濟、辰韓は後の新羅とされており、記述されている頃の年代は概ね前2世紀から後4世紀くらいとのことである。先述でスサノオの出自が新羅系としたことを思い出さないだろうか。そして、天照大神が徐福系（＝秦始皇帝の命で渡来）ということであれば、この両者の関係は（義）兄弟ということにならないだろうか。天照大神が姉だとすれば、スサノオは正しく（義）弟となる訳である。そのような関係を考えると、天照大神がスサノオを異常にかばいだてしたことも何か理解できるような気がしてくるのである。

さて、弟をかばい続けてきた天照大神であったが、スサノオの乱暴に耐え切れず遂には天の岩屋に隠れてしまうのだった。このことの意味するのは、天照大神が死んでしまうということだろう。天照大神＝卑弥呼とすれば、卑弥呼の死を意味することになる。これは大事件であった。高天原も葦原中国も闇に一つまれて、災いが広がっていくのである。災いが広がっていくとは疫病の蔓延を意味するのであり、そのことはまた、生存戦争の再激化をも意味するのである。

魏志倭人伝の記述。“卑弥呼もって死す。更に男王を立しも、國中服せず。更に相誅殺す”である。

この後、魏志倭人伝の記述では卑弥呼の宗女台与が立って、国中遂に定まるのであるが、このことについては次稿にて詳論したい。

了

- 注1 縄文人口シミュレーション
(小林修三：国立民族初物館研究報告)
- 注2 中国王朝400年史 (渡邊義浩：新人物往来社)
- 注3～注6 Wikipedia 抜粋
- 注7 邪馬台国をとらえなおす (大塚初重：講談社現代新書)
- 注8 古代中国における地の測り方と邪馬台国の位置
(野上道男：東京都立大学名誉教授)